

## 7 1 《聖マタイの召命》・真実のストーリー・その2

マタイが椅子に座った姿で描かれる必要はない

2024

真鍋友範

1 カラヴァッジョは、なぜ座った姿のマタイを描いていないのか。



\* マタイはメガネを持った収税人である。

カラヴァッジョの《マタイの召命》、そのストーリー構築は、複雑であるが、しかし、完璧だ。

何故なら、聖書マタイ伝9-9の文言そのものの内容だからだ。  
行間を豊かに創作しているが、書かれた文言そのものは歪めていないのだ。

仮に、マタイは立ち上がったただけなのに、【椅子から立ち上がった、と聖書の内容を変更した絵画を描いたら】、当時のカトリック教会は喜んで受け入れられないだろう。

例えば、ルネサンス期のレオナルドは《岩窟の聖母・ロンドン版》を描いたものの、信仰会側から受け取り拒否された。

この理由は、マリアの腕の中ではない、マリアの腕から離れた位置の幼児イ

エスを描いた為だが、これは聖母無原罪御宿り信心会からの批判を生み、おそらく仲介を依頼されたルイ12世の介入により、イエスの弟子たちによる描き直し作品である《岩窟の聖母・ルーブル版》を生むことにつながった。

\*この根拠は小生ネット論文 《眼鏡の聖マタイ》 2【岩窟の聖母】2017参照

通常、聖書物語の絵画上での再生には、該当時代の教会からの保守的常識感からの抑制的表現を求められる。

当然、バロック時代になり、カラヴァッジョの時代においても教会の反宗教改革運動も相まって、その表現に於いて、ルネサンスと同等か、それ以上に保守的であったことは疑う余地はない。

従って、カラヴァッジョがマタイ伝9-9に関わる宗教物語を描く場合、重要な点は、聖書に記載された正確な内容を教徒に伝えることであった。

では、カラヴァッジョは、この大原則に従って《聖マタイの召命》を描いたのか。

結論から先に述べると、カラヴァッジョは、忠実にこの大原則に従い、物語を構築している。

カラヴァッジョは、収税所を屋外でなく屋内に設定しているが、これは16～17世紀の社会常識的な設定なのだが、当然【イエスは（窓越しに）マタイを見た】ことになる。

屋内である以上、玄関口から収税所に入っていくという設定になる。

収税所では、当然収税作業が進行中だ。マタイは収税人として働いている。

ここで、マタイを収税人として描くのだが、【椅子に座った収税人】としてマタイを描いた場合、マタイはイエスに呼ばれたら、【椅子から立ち上がり、イエスに従わなくてはならない】。

しかし、これでは聖書に書かれている【立ち上がってイエスに従った】という文言に対し、正確ではない。

何故なら、【立ち上がる】は、広い意味を持ち、【体を起こす】の意味があり椅子から立つという意味で限定されないのだ。

つまり、カラヴァッジョは、【立ち上がる】と表現される場面を選択した。

座ったままで金計算に集中するマタイより、その上司として、座っていないが、立ってもいない、机に寄りかかった姿のマタイを描いたのだ。

当然、机に寄りかかった姿の収税人マタイは、【体を起こして立ち上がり】イエスに従うことになる。

【つまり、カラヴァッジョは、聖書マタイ伝9-9の記述内容を正確に再現するという真摯な姿勢で《聖マタイの召命》を描いている】のだ。

これに反して、【座った姿の人物が、マタイであると誤解説する】ローマ・カトリック教会関連の美術史家や、ドイツ学派美術史家は、聖書マタイ伝9-9の記述内容を、【マタイは座った人物に違いない】との主観的判断により、カラヴァッジョの描いた描画内容を歪めて解釈しているのだ。

繰り返すが、聖書マタイ伝9-9の【文面を忠実に再現】したのが、カラヴァッジョの描く《聖マタイの召命》ということになるのだ。